

日本人の宗教心と臓器移植

平川 彰
(東京大学名誉教授)

一

日本人には、脳死を人の死と認めることに反対する人が多い。そのために臓器移植にも反対する人が多いという。正確には、国民のどれだけが臓器移植に反対しているのか、明らかでないが、意見を発表する人の中には、反対意見を述べている人が多いようである。私自身は、脳死を人の死と見る見方を、比較的容易に受け入れたために、脳死を人の死と認めない人びとの心情は、いま一つ理解し難い点があるが、しかし日本人が脳死を人の死と認めない理由が、日本人の宗教心に由来すると見る人が多い。そのためにここには、宗教的な立場から、この問題を考えてみたい。

二

まず第一に、脳と心臓とが、昔の日本人にどのように理解されていたかを見ておきたい。第一に「脳」という言葉や、「脳」という文字は、中國で作られたものであり、それが日本に伝来したのである。その際、日本には中國

語の「脳」という言葉に対応する日本語がなかったので、脳という中國語が、そのまま日本でも用いられているのである。

これにたいして、心臓の「心」という中國語が、その文字と共に日本に入ってきた時には、日本には「こころ」という対応語があつたために、「心」という文字は、中國音で「しん」と読み、同時に日本語で「こころ」と読まれているのである。しかしこの「心」という字は、心臓の形を示す図形からできた象形文字であり、したがって「心」とは、本来は心臓を示す文字であつたのである。同様に日本語の「こころ」という言葉も、本来は心臓を意味する言葉であつたようである。この言葉は、江戸時代の國学者の語源解釈によると、「こる」という言葉が強められて、「こころ」となり、これが転じて「こころ」になつたと解釈されている。しかし「こる」とは、「かたまる」という意味であり、身体のかたまつたところ、即ち内臓を「こころ」と言つたらしい。しかも内臓のうち、とくに心臓を意味したのである。したがつてこの解釈によれば、日本語の「こころ」も、本来は心臓と指していたようである。

しかし中國でも、日本でも、魂は心臓に宿っていると考えられたから、心臓を示す「心」という言葉に、精神の意味が加えられて、「心」という文字は、心臓を示すと共に、こころをも示すようになったのである。そのために現代でも、医師が「心」と言えは、心臓を指すことが多いが、われわれが「心」といへば、こころを意味することが多いのである。例えば「心肺同時移植」などと言へば、この心は心臓を意味するのである。

これにたいして、「脳」という文字は、髪の毛と、頭の丸い形とを結合することを示す文字であり、例えば「脳天」といへば、頭の頂を示すように、頭と脳とは同一に見られていた面がある。そのために脳を指すのに、とくに「脳髓」という言葉も用いられている。この場合は、脳髓の集り、その全体が脳であるとも見られ、或いは脳

髓を入れている容れものが、脳であるとも考えられるのである。このことは、「脳」は頭蓋骨の中にあるものを指すとしても、脳に精神作用のあることは、あまり認められていなかったことを示すようである。

以上のように、中國や日本では、古くから「心」という言葉に、心臓の意味と、こころの意味とが与えられているのであり、「脳」という言葉に「こころ」や「精神」の意味が、あまり認められていなかったと思うのである。

このことは、仏教が中國に伝来した時の「こころ」の訳語の取り扱いにも現れている。インドでは、古くから「こころ」と「心臓」とは、別の言葉で現されていた。即ち「心臓」は、サンスクリット語では「フリダヤ」(hr̥idaya)と呼ばれている。これは、英語では「ハート」(heart)に相当するのである。これにたいして、日本語の「こころ」に相当する英語は mind が近いかと思う、即ちこのように、英語でも、「こころ」と「心臓」とは別の言葉で示されているのである。これにたいして、サンスクリット語でも同様に、こころと心臓とは、別の言葉で示されている。即ちサンスクリット語で、こころを示す言葉には、チッタ (citta)・マナス (manas)・ヴィジュニヤーナ (vijñāna) 等の言葉がある。仏教が中國に伝ったとき、これらの語が中國語に翻譯せられたか、原語を区別するために、citta が「心」と訳され、manas は「意」と訳され、vijñāna は「識」と訳された。チッタを「心」と訳したのは、これは日本語の「こころ」の意味である。次にマナスを「意」と訳したのは、「意志」の意味を示すものであり、これは「考える」という意味である。第三にヴィジュニヤーナを「識」と訳したのは、「認識する」という意味を示すものであり、また「判断する」という意味もある。ともかく、チッタとマナスとヴィジュニヤーナとは、心の異なる作用を示しているが、しかしインドでは、これらは名前は異なるが、しかし同じものを指すのであると言っている。

ともかくここで、サンスクリット語では、こころを示す「チッタ」と、心臓を示す「フリダヤ」とは、言葉が違

うのであるが、これが中國語に翻譯されるときに、同じ「心」という言葉で訳されているのである。インド人の考
えでは、心臓は形があり、身体の中における「存在する場所」もきまつているが、しかし「心」は、形がないもの
であり、どこにあるか場所も確定できない。しかし心理作用を営むものとして、実在であると考えて、こころを心
臓と同一視することをしなかつたのである。しかしこの「こころ」を示す「チッタ」という言葉が中國に翻譯され
た時に、中國人はこの語を「心」と訳し、さらに心臓を示す「フリダヤ」をも、同じく「心」と訳したのである。
例えば「般若心経」という場合の「心」は「フリダヤ」を訳した言葉であり、その意味は「本質」^{エッセンス}「精髓」などの
意味である。

ともかく中國人が、「チッタ」も「フリダヤ」をも、同じく「心」と訳したのは、中國人が「こころ」は心臓に
宿っていると考えたからであろうと思われる。

これにたいして、「脳」という言葉は、サンスクリット語では、マスタ (masta)、或いはマスタカ (mastaka)
というが、しかしこの語には「頭」という意味もある。そのために仏教では、この語をパーリ語で「マッタ」
(matha)といい、このほかに「脳髓」を、「マッタ・ルンガ」(matha-lunga)と呼び、脳髓は頭蓋骨の中にあ
ると言っている。仏教では、脳は、他の身体の臓器等と共に、二五〇〇年前の釈迦の教説の中にすでに説かれてお
り、釈迦の時代からその存在が知られていたのである。

インドでは、人が死んでも、屍体を地下に埋めないで、屍体を布で巻いて、墓場に放置しておくのである。その
ために屍体は日ならずして腐敗し、膨張し、皮膚が破れて、膿や血が流れ出る。さらに屍体は鳥や犬などに喰われ
て、臓器が露出する。仏教の修行僧は、この墓場に坐して、人間の肉體は醜いものであり、無常であることを観察
するのである。そのために早くから、身体の部分や臓器については、かなり正確な理解を持っていたのである。そ

して身体を構成する部分を「三十二身分」と呼び、その中には「脳髓」も含まれている。(『小誦経』第三、「南伝大藏経」第二三卷二頁)。さらに原始仏教の経典のうち、西紀三八四年に中國に翻譯せられた『増一阿含経』という経典には、死後に地獄に落ちた罪人が、針の山に追上げられ、痛さに堪えかねて、木の上に逃げると、そこに鳥がいて、罪人の頭をつついて、脳を取って食べると述べている。(大正大藏経、第二卷六七五頁中段)。この記述から見て、脳は脳髓を指しているとみてよいと思う、かかる経典が翻譯されているから、中國でも脳は頭蓋骨の中にあることが早くから知られていたと見てよい。しかし脳が心理作用をいとなむ臓器であることまでも理解されていたとは認め難い。

なお西紀五世紀ごろに、スリランカで作られた仏教の経典の註釈の一つに、脳を説明して、「頭蓋骨の中にある脳髓の集まりが脳であり、脳は白色である。その色はバターになる前の腐敗した牛乳の色と同じである。それは四つの部分から成立し、結合された団子の如き形をしている」と説明している。このように仏教では、身体の解剖学的理解はかなり進んでいたようであるが、しかし脳の機能についてどんな理解を持っていたかは不明である。

ともかく日本人の脳や心臓に関する理解には、この外に中國から日本に伝った漢方の医学の解釈も重要であるが、私は漢方については全く不案内であるので、何も言うことはできない。しかし概して言えば、脳の心理作用の理解は、日本に西洋医学が伝わった江戸時代の後期からではなからうか。したがって明治以後には、日本人も脳の機能について、正しい理解を持っていたであろう、それ故、心の作用は脳にあるということを疑う人は、現代の日本人には恐らくないのであろう。しかしそれでもなおかつ、魂は心臓に宿っていると考える人は多いよいである。とくに宗教の中では、仏教や神道を信ずる人に、この考えを持つ人が多いと思う。

例えば神道の或る宗派の人びとは、心臓が機能を失って、役立たなくなつたために、心臓を除いて、人工心臓に

取り替えた場合に、若し魂が心臓に宿っているとすれば、人工心臓になった場合にはどうなるかというに、この宗派の人びとは、その場合に魂は、人工心臓に宿るといのである。心臓が人工心臓に取り替えられたとしても、人間が生きている限り、魂は心臓に宿ると考えているのである。ここまで考えるのは極端のように思うが、しかし心臓が動いている限り、たといそれが人工呼吸器で動かされていても、さらにその時、脳死の状態に陥っていたとしても、なおかつ魂は、心臓にとどまっていると見る人が多いのである。心臓が生きているということが、重要視されるのである。

三

もともと日本人の考えている魂は、人が死んでも存在するものである。人が死ねば、その魂は身体を離れて、近くの森や山に住しており、子孫を守ってくれると信ぜられている。しかし子孫が死者の祭りをしないと、その霊魂は怒り、悪霊となって、子孫に災いを与えると信ぜられている。このように、魂の次元で考えると、魂は生から死へと、連続して存在するために、生と死との区別がはっきりしないのである。しかしそこで生と死とを分けるとすれば、その人の魂が、身体を離れたときが、その人の死であるということになろう。

しかしその場合、脳の作用はどうなるのかという問題がある。死を、心臓死で判定する場合には、心臓の機能が停止する時と、脳の機能がなくなる時と、時間がほぼ同じであるから、問題はないが、しかし脳死の場合には、脳の機能が失われても、まだ心臓が動いているから、心臓には魂が宿っていると見る人びとには、脳死を直ちに個人の死とすることに、強い違和感を持つのである。それ故、脳は死んでいても、まだ動いている心臓を切り取って、

他人に移植することに、倫理的な不信感を持つのである。そのために自分に関係のない、他人の臓器移植にたいしても、強い反感を持つのであらうと思う。

同時にこのことは、心臓の移植を受けたいと願っている人に対する「非難」の感情ともなっているように感ずるのである。とくにこの反感は、心臓移植に向けられているように思う。肝臓移植の場合には、ドナーの肝臓を一部分切り取っても、生命に別状はないようであるし、腎臓移植の場合にも、腎臓を一つ切り取っても、まだ一つ残っているから、移植によって、ドナーが死ぬことはない。しかし心臓移植の場合には、心臓を移植すれば、ドナーの生命は確実に失われる。したがって脳死を人の死と認めない人びとにとっては、心臓移植は倫理的に容認し難いことになるのであらう。

しかしこの心臓移植への反対は、一般的・倫理的な立場からの反対であり、移植を受けたいとする個々の患者に対する非難ではないようである。臓器移植以外に助かる道のない病人の苦しみに対しては、何人といえども同情を禁じ得ないであらう。そのために日本では手術を受けることができない人びとが、外国で心臓移植の手術を受けるために出かけて行くが、それらの人が国民から非難を受けることはないようである。そして国内でも、肝臓移植の手術を受ける人が、巨額な手術費用に困るとき、それを援助せんとする人は決して少なくないのである。

なおもう一つ、日本人が臓器移植に反対する理由は、死んだ人の身体を傷つけることを嫌う心情が、日本人には強いからである。勿論これは日本人だけではないであらう。中國の考経にも「身体髮膚、これを父母に受く。敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」とあり、中國人にもこの考えはあらう。しかし今は中國人の場合は措いて、日本人の場合を考えたい。

日本では、病院で人が死んだ場合、医師が死体の解剖を希望したり、角膜の提供をすすめたりしても、それを断

る人が多い。角膜については、スリランカからしばしば角膜が日本に寄贈せられることが、新聞に報道せられている。即ち仏教國でも、スリランカやビルマ、タイ等では、死人の屍体を尊重する風習は見当たらないのである。同様にチベットでも、鳥葬が行われており、死者の身体は山に運ばれて、ばらばらに解体されて、鳥に食べさせてしまう、インドのパーシー教でも、同様な葬式を行っている。インドのヒンドゥー教徒やタイ、ビルマの仏教徒等も、屍体を火葬にしたり、或には墓場に放置しておくが、しかし遺骨を尊重したり、或いは墓を建てて、遺骨を祭ることとはしない。年忌なども行わない。死者は死んだあとには、再び生れ変わってどこかに行ってしまうのである。いわゆる輪廻転生すると信ぜられているから、その霊を墓に祀ったり、年忌をしたりすることは効果がないと見られているのである。次に台湾でも、お墓は作るが、葬式に僧侶を呼ぶことはしないという、韓國でも、人が死ぬと、その親族は自分の所有する山に屍体を埋めるといふ。しかも墓を作る人は少ないよいである。そして死者を埋葬する山を持たない人は、屍体を火葬にして、その遺骨や灰を、山にばらまいたり、河に流したりするという。故に韓國でも多くの人は、墓を作らないのであり、葬式に僧侶を呼ぶことはなく、親族だけでおこなうという。したがって年忌法要などもしないのである。日本人が年忌法要をするのは、死者の靈魂をねんごろに祭る意味がつよいと思うが、しかし浄土教の如く、死者は極楽に往生すると信ずる立場では、極楽に往生してしまつた祖先の靈魂が、子孫の年忌に法要に應じて戻ってくるかと考えているのかどうか、こういうギリギリの問題になると、浄土教の信者としての信仰の立場よりも、日本人としての先祖崇拜の精神の方が、より強く日本人の宗教心を支配しているように思われる。

それはともかくとして、以上の如く、スリランカ、ビルマ、タイ、チベット、台湾、韓國等の仏教國では、とくに死者の遺骨を尊重して、礼拝したり、墓を建てて祭ることはしないのである。これにたいして日本人は、死者の

遺骨に靈魂が宿つていると考えて、これを尊重し、墓を建てて祭る風習がある。もちろん日本でも、古くには土葬を主としていたから、死者を火葬にして、その遺骨を祭ることは、主として明治以後の風習と言つてよからう。しかしそこには、日本人の古来からの靈魂觀が生きてきていると思うのであり、そこには死者の魂を、その身体と共に祭るといふ考えが認められると思う。

日本人が靈魂を遺骨と同一視することは、この前の戦争で、戦死した日本人の遺骨を、日本に迎える仕方にも認められる。例えばさきの太平洋戦争にむいて、南方の戦場で多数の日本兵が戦死したが、その遺骨は長く放置されていたのである。それがようやく回収が可能になると、非常に熱心に遺骨の回収がなされるようになった。そしてその遺骨は、千鳥が淵の戦没者墓苑に納骨せられた。しかしそれらの遺骨を回収するとき、単に遺骨を故國に迎えるだけでなく、同時にその靈魂をも故國に迎えるという理解に立っている。ある新聞の記事によると、昭和五九年五月二八日に、七八五柱の遺骨を千鳥が淵の戦没者墓苑に納骨したが、それまでに三二万一六三三柱の遺骨を納めたと報道している。その場合の柱とは、神様を数える仕方であり、遺骨を柱で呼ぶのは、それを神と見ていることを示すものである。南海に迷っている靈魂を、遺骨と共に故國に迎えることを意味しているのである。即ち、遺骨を遺骨だけで考えないで、靈魂と一体になったものと見ているのである。

或いはまた先年、日航のジャンボ機が群馬県に墜落して、五〇〇余人の乗客と乗員とが犠牲になるといういたましい事故があつたが、日本人はかかる場合、遺体の収容に非常に熱心であつた。しかし五〇〇余人が一度に遭難したので、多数の遺体の断片など、誰のものか特定することができないものが沢山出た。日航はこれらを特定できないままに火葬にしようとしたら、遺族から激しく反対されて、火葬にしないで、そのまま祭つてあるということである。かかる場合に、遺体をそのまま捨ててしまうと、あとの崇りがこわいということがあると思うし、そうでな

くとも、肉親の身体を特定できないままに捨てることは忍びないという気持があると思う。ここにも死者の身体を、単なる物質と見るのできない気持が現れていると思う。これにたいして、このとき同時に遭難した西欧人の場合は、遺体の収容にあまり熱心ではなかったと言われている。

同様にさきの太平洋戦争の場合にも、アメリカ兵が日本兵の頭蓋骨や遺品などを、スーベニールとして持ちかえたり、知人に記念品として贈ったと言われている。例えば一九四四年五月二日附の『ライフ』誌には、戦場のアメリカ兵から贈られた日本兵の頭蓋骨を眺めながら、手紙を書いているアメリカ人の女性の写真が載っているという。一九四四年といえは昭和一九年であるが、戦争末期に戦勝國のアメリカ兵が日本兵の頭蓋骨等を土産品として持ち帰ったことは、他にも多くの例が報告されている。これはアメリカ兵が、とくに日本兵の遺骨を恥かしめようとしたのではなく、単に「珍奇なもの」と見たのである。即ちアメリカ人は人間の遺骨にとくに宗教的な畏敬の念を持っていなかったことを示すものであると考える。

四

ともかく日本人が遺骨を重んずるのは、自分の遺骨も子孫によって尊重せられ、遺骨と共に自己の靈魂が、子孫によって祭られることを願うのである。そのことは身寄りのない人の場合も同じであり、自分の死んだあとに、自分の遺骨がどこかに祭られて、何人かによって、いつまでも祭られ、拜まれることを願うのである。日本人はこのように遺骨を尊重すると同様に、日本人は死者の身体を傷つけることを嫌うのである。理由なしに死者の身体を傷つけることは、法律でも禁止されている。このように身体を傷つけることを嫌うのは、身体が神聖なものであると

いう考えがあるからであると思う。

周知の如く、西欧社会では臓器移植が比較的容易に受け入れられ、治療方法として社会的に支持されていると思われる。この現象を宗教の立場から見ると、キリスト教では、肉体と靈魂とをはっきり分けて理解する。これにたいては日本人は、魂を心臓と即一に見ることに示されているように、身体と靈魂とをはっきり分けずに理解し、身体にも宗教的に「聖なる性質」を認めるのである。

キリスト教は物心二元論に立っており、靈魂は神聖なる存在と見られており、これは死後に神によつて救われて、神の國に甦がえるものとされる。しかし人間の肉体は単なる物質であり、虚無に帰するものと見られている。即ち人間の肉体は、神の救済の対象ではないのである。そこには物と心とを峻別する物心二元論の見方がある。このように、肉体に神聖な価値を認めない考えたかは、肉体を道具として見る考え方に通ずるものであり、臓器移植を受け入れ易い考え方であると思う。

このことは、西欧人の生活習慣とも関係がある。西欧人は昔から狩猟・牧畜を生活の基盤としており、家畜を食料として生活してきた。そのために家畜と共同生活をしており、冬には家畜と同じ屋根の下に住んでおり、必要な時に殺して食べるのである。そのために家畜の出産の仕方や、身体の構置等が明らかに、それらが基本的には、人間と同じであることを学んだのである。そのために身体の点では、人間と動物との間には基本的には何等の違いのないことを認めざるを得なかった。即ち人間と動物との相違は、精神の側に求められたのであり、人間には靈魂があるが、動物には靈魂がないと考えられた。そのために人間が死んで、靈魂が去ったあとと肉体は、物質にすぎないと考えられ、このことが、脳死や臓器移植を容易に受け入れる理由の一つになっていると考えられる。そして家畜を殺せば、その骨なども附近に放置されることがおこつたであろうから、人間の骨が動物の骨に似てい

ることも自然に理解せられ、動物の骨に似ている人間の骨に、特別の感情を持つこともなかったであろうと思われる。

これにたいして、日本人は古くから農耕民族であり、穀物や漁貝類等を主食として生活してきた。そのために大きな獣類を殺して食べる機会も少なかったであろうし、動物の屍体や骨にたいしても、西欧人のような慣れが無かったと思う。そのことが、日本人が、人間の死骸や遺骨等にたいして、宗教的に不気味な感情をいだいた理由ではなかったかと思うのである。

日本人が人間の屍体にたいして、宗教的に特別の感情を持つことは、日本人が屍体をおがむことにも見られる。即ち、日本では、死ねばほとけになると信ぜられている。例えば、瀕死の病人でも、生きてるうちは拜まれることはないが、その人が息を引きとれば、とたんに拜まれるのである。しかし「死ねばほとけになる」ということは、仏教の教理からは必ずしも説明できるものではない。そのために柳田國男は、この場合の「ほとけ」は、本来は「ホトキ」であって、「ホトキ」というのは、死者に食物を盛って供える小さな器のことであると解釈している。しかし一般には、死んだらほとけになるという場合の「ほとけ」は、仏の意味に理解されている。そして近親者は、死んだ人が迷わず成仏するように、熱心に拜むのであろうと思う。

ともかく屍体を恥かしめたり、粗略に取り扱ったりすると、死者が祟るという考えがあると思う。そのために日本では、死者の屍体にたいする不気味な怖れと、畏敬の念とがまじって、死者をほとけとして拜むことが生じたのではないかと考える。東京大学の柳川啓一教授によれば、屍体をほとけと言うことは、日本独特の風習であるといっている。同じ仏教國でも、台湾や韓国、南方の華僑等にはこの風習は見られないという。

以上、種々の例に示したように、日本人が昔から受けついでいる宗教心、靈魂観では、靈魂を純粹に精神的なも

のとは見ないのであり、これを身体と合した形で受けとめていたと思うのである。そしてこのように「身体をそなえた靈魂」の祭りを怠ると、祟ると怖れられていたのである。死霊が死後にもしばらくは身体にとどまっていると信ぜられていたために、死後の身体を傷つけることを望まないものであろうと思う。このような「死者の身体観」を持っている人びとには、「脳死であるから、臓器の提供を」という申し出は、説得力が弱いと思う。脳死になっても、なお靈魂がとどまっていると信じているからである。

五

以上、日本人の宗教心を検討して、日本人の宗教心には、脳死を人の死と認めることに反対する心情や、臓器移植に賛成し難い心情があることを指摘した。このことが、日本で臓器移植が行われ難い大きな理由であるように思う。しかし人間には、他人のために役立ちたいと望む気持ちがある。自己が社会のために役立っていると考えることが、人間の生甲斐の原動力になっていると思う。そして日本人にも、他に奉仕したいと考える倫理観が欠けているとは思わない。さきにも一言したように、臓器移植は莫大な費用を必要とするが、この費用がなくて困っている人に、一般から多くの援助が寄せられるということは、これまでにも一再ならず報道されている。さらにボランティアの活動も、日本でも次第に盛んになってきている。そして脳死を人の死と見ることに反対する人でも、臓器移植には必ずしも反対しないのである。

これは一つには、脳死においてはたとえ人工呼吸器によって、心臓が動いているにしても、ともかく心臓が動いている以上、それを「人の死」とは認め難いと思う人の場合でも、人が一旦脳死状態になれば、その人に再び意識

が戻ることはないということが知られてきたからであると思う。そしてまたこの時、人工呼吸器をはずせば、心臓は必ずとまるという医学上の判断を、一般の人が受け入れるようになったからであると思う。即ち脳死状態に陥れば、たといそれが「人の死」でないにしても、ともかくそれは「人の死」に無限に近いのであり、しかも回復不可能であるということを認めるからであると思う。即ち脳死はたとひ死ではないにしても、死と殆んど異ならないのであり、再び生き返ることはないという理解が、一般人にも行きわたってきたためであると思う。

それともう一つは、苦しんでいる人のために、自己の身体を役立たせたいという「奉仕」の精神が何人にもあるということ、以上の二つのが連動して、脳死を人の死であるか否かの問題は棚上げにして、若し自分が脳死になつたら臓器を提供してもよいと考える人が、日本にも次第にふえていくと思うのである。したがつてこのように、自己が脳死に陥つたら臓器を提供してもよい、むしろ「提供したい」と希望する人があつた場合、それを第三者が反対することが許されるかどうか、反対することが妥当であるかどうかという問題が起るわけである。脳死になれば深い昏睡状態に陥つてしまつて、もはや自己の意志を表明することはできないであろうから、脳死に陥る前の本人の意志を尊重するか否かという問題になるわけである。

このように死に直面している人の場合には、他人が意見を主張すべきではなく、本人の意志を尊重すべきであると考えるのである。この問題は、尊厳死や安楽死の問題と軌を一にした問題であると思う。

尊厳死の場合、現代の医学では病気の回復が絶望であることと、死が迫つていくこと、本人がこれ以上の医療を受けることを拒否することなどが総合されて、尊厳死が実行されている。かかる場合、いろいろな事情を考慮して、医師や近親者が、本人の希望を容れて、医療を中止したために、死期を早めることがあつてとしても、それが第三者から非難されることはない。それはやむを得ないことであり、そのような生き方、即ち死に方があることが認め

られているのである。即ち尊厳死は慎重に取扱われねばならないが、或る場合には尊厳死が許されると思うのであり、脳死に陥った場合も、尊厳死の場合と同じに考えるべきであると思う。脳死に陥った人が、脳死の判定が正確に行われておれば、その人にとって、残された生命は短いのであるから、かかる場合には「臓器を提供したい」という本人の希望が認めらるべきであると考えるのである。

即ち尊厳死は、本人の希望で死期は早めることを認めるのであるから脳死に陥った人にも、臓器を提供する自由が認められるべきであると考ええる。しかし勿論これは原則論であつて、同時に他のいろいろな条件が考慮されねばならないとは言うまでもない。本人が生前に希望しておれば、その人が脳死に陥れば自動的に臓器移植がなされてよいと言うのではない。例えば脳死に陥った人が、妊娠している婦人であり、臨月も近いというような事情があれば、そのことは当然考慮されねばならないわけである。外にも、事前には考えられないような問題が起りうるから、臓器移植はそういう事情が考慮されるべきこととは言うまでもない。そのためには臓器移植をする医療機関には、健全な倫理委員会が機能することが大切である。